小山工業高等専門学校研究紀要
第三十一号（一九九九）一七一－一七八

漢俳研究序説

The Introduction to a Study on Han-Pai

中田伸一
Shinichi Nakada

一　日中文化交流の副産物――漢俳

漢俳は、一九八〇年五月、日中文化交流の気運が盛りあがった時期に生まれた、俳句と同じ十七字から成る、中国風の俳句である。世に出たころ「和風漢俳」「唐風俳句」「漢詩俳句」「漢字俳句」などと呼ばれたこともある。共に五・七・五の定型詩ではあるが、俳句は音節数でかぞえるのに対して、漢俳は漢字数でかぞえる。

漢俳を初めて世に送り出したのは、趙樸初（一九〇七～　）中国仏教協会会長兼中日友好協会副会長である。趙氏は八〇年に二つの日中文化交流事業に携った。一つは、唐招提寺の鑑真和上像を千二百余年ぶりに故郷の楊州に「里帰り」させたこと、もう一つは、俳人協会の訪中を支援したことである。いずれの場合も、日本側関係者に自作の詩を墨書して贈った。それがすなわち漢俳である。まず、唐招提寺の森本長老に贈った三首を紹介する。

送鑑真大師像返奈良　　鑑真大師像の奈良へ返るを送る
並呈森本長老　　並びに森本長老に呈す

（一）
看尽杜鵑花　　看尽す　杜鵑（つつじ）の花
不因隔海怨天涯　　海を隔つるに因って　天涯を怨まず
東西都是家　　東西　都是（すべて）家（すみか）なり

（二）
去住夏雲閑　　去るも住（とど）まるも　夏雲閑（しずか）なり
招提灯共大明龕　　招提の灯と共にあり　大明の龕（とうろう）
双照涙痕乾　　双（なら）び照らされて涙痕乾かん

（三）
万緑正参天　　万緑　正に　天にも参（とど）かん
好憑風月結来縁　　好き風月に憑（よ）って来縁を結ばん
像教住人間　　像教（ぶつきょう）人間（じんかん）に住む

鑑真（六八八－七六三）は揚州大明寺で戒律を講じていたとき、日本の留学僧栄叡（ようえい）・普照（ふしょう）の二人から来日の要請を受けた。求めに応じて翌年出航しようとしたが、誣告を受けて挫折。その後も失敗を重ね、六回目にようやく九州坊津に上陸したときには既に失明していた。奈良を活動拠点にして、仏教界の興隆に尽力、晩年は私寺である唐招提寺に入り、そこで入滅した。死の直前に、弟子たちによって乾漆像が作られた。それが千二百余年の後、森本孝順長老に付き添われて大明寺に還った。当時このニュースは「人民日報」に詳しく報道された。

一首目。鑑真は故郷揚州の杜鵑花（つつじ）をながめ尽くした。海を越えて再び奈良へと帰ってゆく身であるが、うらめしくはない。東の日本も西の中国も、鑑真にとっては同じ家なのだから。「杜鵑花」は季語に相当する。「花」と「家」は脚韻をふむ。

二首目。夏雲は先を争わず、ゆったりと流れる。唐招提寺の燈火も

大明寺の石燈籠も同じ宗門を照らす。いま御身を照らす故郷の光、涙のあとの乾こうものを。二句目の「双照涙痕乾」は、杜甫の「月夜」の第八句目と同じ表現。安禄山の反乱軍に占領された長安にいて、疎開中の妻子をしのんだ心を、趙作品は、盲目の老僧への憐憫に転化した。芭蕉が鑑真像に接してよんだ句「若葉して御目の雫ぬぐはばや」をも連想させる。

三首目。まず、生気あふれる初夏の季節感を表す。二句目は、日本の長屋王の故事をふまえる。王は七二九年に政変の犠牲になった皇族であるが、生前、唐土の僧侶に一千の袈裟を布施した。その袈裟には「山川異域　風月不同　寄之仏子　共結来縁」という四句が縫いとりされていた。（淡海三船『唐大和尚東征伝』）趙氏の漢俳は、長屋王の厚情をたたえ、仏教東伝に身命を賭けた古代人の志に、日中交流の原点をみているようである。

趙樸初の漢俳が公表されると、詩人の間に反響があった。畢朔望、中国作家協会対外委員会責任者は、趙作品と同じ韻字を同じ順序で使う、いわゆる次韻漢俳を作った。（この作品は、五月三十日に俳人協会訪中団との座談会で披露された。）

俱着唐紀花。　　俱に唐紀の花を着す
詩心茶道寄天涯。　　詩心　茶道　天涯に寄す
月明在両家。　　月明　両家に在り

一九八〇年五月、中日友好協会副会長の趙樸初が、俳人協会訪中団を迎えたときに贈った漢俳は、次の三首である。

有贈日本俳人訪華団（三首）

（一）
幽谷発蘭馨
上有黄鸝深樹鳴
喜気迓俳人

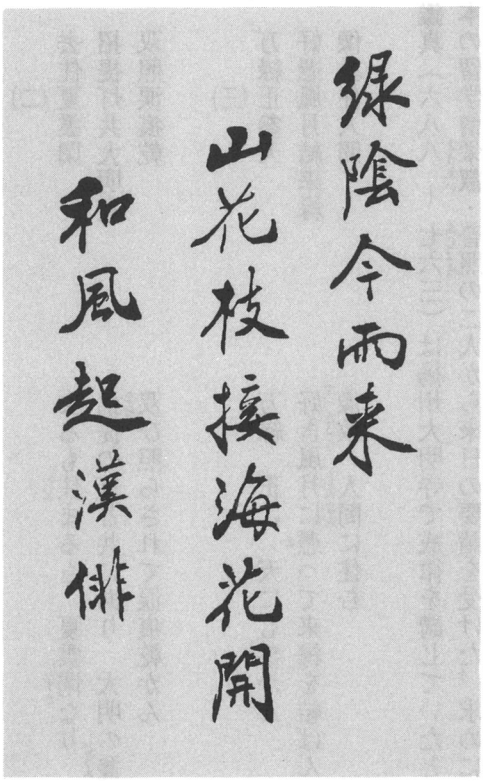
（一）
幽谷に蘭の馨発す
上に黄鸝の深樹に鳴ける有り
喜気て俳人を迓う

（二）
上憶土岐翁
嚢書相贈許相縦
遺愛緑陰濃

（二）
上に憶う　土岐翁
嚢書を相贈り　相従うを許せり
遺愛　緑陰より濃し

（三）
緑陰今雨来
山花技接海花開
和風起漢俳

（三）
緑陰に　今　雨来たり
山花の枝に接いで海花開く
和風　漢俳を起す



趙樸初の揮毫した漢俳

一首目は、俳人協会代表団の訪中を祝賀した、いわば挨拶詩。一、二句中の「蘭」と「黄鸝」（うぐいすの一種）のとり合わせは、初夏の季節感を表している。また、中国風の花鳥の趣味もうかがえる。日本の詩人文人も、「梅」に「うぐいす」に代表される、花鳥のとり合わせを好んでとりあげてきた。（注1）

二首目は、八〇年四月に他界した、土岐善麿への追悼詩。二年前の七八年に訪日したとき、日中文化交流協会主催のレセプションにおいて、豪華本を贈られ、親しく詩歌を語り合った、その「遺愛」をしの

んでいる。三句目の「緑陰」が季語。「従」と「濃」は脚韻。

三首目は、直前の「緑陰」から始まる、これは尻取り。雨期を迎えて移りゆく開花前線。「山花」から「海花」へと咲き移るが、二つの花は具体的に何を指すのか不明。日本と中国をそれぞれ指すのかもしれない。三句目で、俳句が漢俳を立ちあがらせた、と歌う。「漢俳」の名はこの句に由来する。その意味では、記念碑的な一首である。

漢俳は俳句と同じように、十七文字の枠のなかで、言語の暗示性や象徴性を引き出そうとする。ただし、仮名に比べると、一文字一概念の漢字の方が情報量が多いので、詩情を構成するゆとりがある。漢俳一首は、俳句二首か三首に相当するだろう。漢俳に季語は盛りこめても、切れ字の効果は出せないが、脚韻を使って、音律効果を出すことができる。漢俳は俳句の形式を踏襲している。しかし、異質な面も少なくない。漢俳は日中文化交流を機縁として、俳句を「母」として生まれたが、中国の言語で書かれる以上、実質は最新型の漢詩とみるのがよいと思う。

二　俳人協会訪中団

漢俳は日中文化交流を機縁として生まれた。生みの親である趙樸初は仏教協会会長として、また、中日友好協会副会長として、日本側関係者と折衝し、いずれの場合も、漢俳を贈って真情を表現した。それは私的な、あるいは儀礼的な動機から発したものであるが、すぐに賛同者が現れた。この章では、漢俳を公式に記録した日本側の資料である『俳人協会訪中団報告書』(注2)によって、誕生前後のようすを明らかにする。

訪中団は、大野林火を団長とし、井本農一、岸楓三楼を副団長とする、総勢二十一名で編成された。八〇年五月二十九日から十泊十一日の日程で、北京・蘇州・無錫・上海を訪問、その間に中国の詩人と友好を深め、各地の風物に接して詩嚢を肥やすことを目的とした。

漢俳が初めて日本側に示されたのは、三十日の中日友好協会会議室での座談会においてであった。中国側の出席者は、趙樸初の他に、林林（中国人民対外友好協会副会長）、姚雪垠（作家・詩人）、畢朔望（中国作家協会対外委員会負責人）、李芒（中国社会科学員、外国文学研究所）、劉振瀛（北京大学教授）、葉渭渠（人民文学出版社）、文遅（中国人民対外友好協会副会長）、李鉄民（同協会工作員）、らである。中国側から、今日の俳句界の状況について質問があり、大野団長と井本副団長が説明した。そのあと、趙樸初の漢俳が披露され、この詩をめぐって話がはずんだ、と『報告書』にはある。第一章で紹介した、畢朔望の漢俳も続いて披露された。

夕刻から、北海公園にある仿膳餐庁で招宴が開かれた。ここでは、林林が漢俳を示して、遠来の客をもてなした。作者は一九一〇年、福建省詔安県生まれ。三〇年代には早稲田大学に留学している。

難得俳人来
北海楼頭薄酒会
談詩真快哉

得難くも　俳人来たる
北海の楼頭　薄酒の会
詩を談ずるは真に快なるかな

小令和俳句
語短却把深情吐
梅楼共処古

小令と俳句と
語短くして却把（かえつて）深き情を吐く
梅楼　共に古（いにしえ）に処（お）る

嚶々求友声
一葦可航賦両京
同杼千戴情

嚶嚶（おう）たり　友を求むる声
一葦もて航して　両京を賦すべし
同に杼（の）べん　千戴の情

三首とも、俳人協会の訪問を歓迎する心情があふれている。一首目は、交流が実現するまでの苦難の道のりを「難得」nán dé の二文字にこめ、酒を飲み詩を談じる快楽を叙した。二首目は、小令と俳句とは詩型は小さいけれども、深い心情を表すには、かえってその方がよい。今しも仿膳の梅楼では、両国の古典談義が花盛り、とうたう。「小令」は詞の短いもの、宋代以降、五十八字以内の短詞をそう呼んだ。三首目の「嚶嚶」は、仲間を呼ぶ鳥の声。『詩経』の「伐木」に用例がある。「一葦可航」は、一葉の小舟で航行できる、の意。『魏志』の文帝紀に典故がある。両国は一衣帯水の近い間柄、一葦の小舟で渡

れるほどである。かつて、漢の班固は「両都賦」のなかで長安と洛陽を詠じたが、今夜は北京と東京をたたえよう。そして、千年の友誼を語り合おう、と結ぶ。

俳人協会訪中団は翌三十一日から観光中心の日程になり、万里の長城、十三陵、頤和園、天壇に遊んだ。二日以降は江南の蘇州・無錫・上海の各都市を回った。七日夜、上海の錦江飯店において招宴が開かれた。中国側の出席者は次のとおり。

杜宣（中日友好協会上海分会副会長）、呉朗西（翻訳家）、呉元坎（翻訳家）、王文生（中国古代文学理論研究会秘書）、王水照（中日友好協会理事）、文遅（中国人民対外友好協会副会長）、張和平（中日友好協会工作員）、李鉄民（同工作員）。

席上、杜宣の漢俳が披露された。

君来自東島　　君は東島より来たり
江南応是榴花早　　江南は応に是　榴花早し
友誼比花好　　友誼は花よりも好し

あなたがたは東方の島国よりおいでになった。江南は折しも柘榴が早々と花を着けている。花も結構ではあるが、われわれの友誼はいっそう好ましいもの。

この一首は、王維の詩「君自故郷来　応知故郷事来日綺窓前　寒梅著花未」（「雑詩三首」其二）に似通った趣がある。王維は阿倍仲麻呂に送別詩を贈ったことがある。唐代に一日本人に対して友情を示した王維を念頭に置いたとみられる。杜宣は一九一四年、江西省九江生まれ。日本大学に留学。後に、劇作家、散文家、詩人、社会活動家など多方面に活動を展開。上海大学客員教授。

俳人協会訪中団は、日程の十一日にあたる六月八日、帰国の途に就いた。俳人協会はその後、平成四年までに通算八回におよぶ訪中団を派遣した。

第一回目に、中国側の詩人が俳人訪中団に漢俳を披露したことを先例として、二回目以降はそれが恒例となった。俳人協会の訪中は、漢俳誕生の呼び水の役割を果たした。

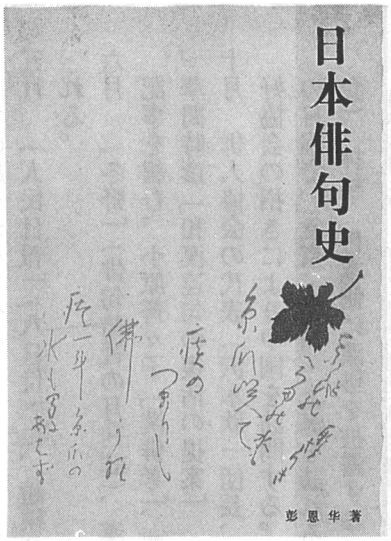
三　漢俳の誕生に至るまで

本章で話題にするのは、漢俳が誕生した一九八〇年以前の中国人の俳句理解の実態と、八〇年以降数年間の漢俳草創期の動きである。中国には、およそ六十年間の俳句理解の蓄積があり、この期間を漢俳前史ととらえることも可能である。まず、この六十年間をながめてみる。

中国において、短い詩（小詩）への関心が高まるのは、一九一七年の「文学革命」以降である。従来、十六字令（小令）のような、短いうたもあるにはあったが、例外的なものにすぎない。進取の気性に富む知識人のなかには、外国の短い詩を翻訳する者もいた。日本詩歌の翻訳の先駆者に挙げられるのは周作人（一八八五－一九六七）である。彼は日本留学中に身につけた語学力を生かして、俳句、短歌、川柳を翻訳し、一九二一年に『小説月報』（第十二巻第五号）に発表した。俳句では、松尾芭蕉、与謝蕪村、小林一茶、正岡子規。短歌では、和泉式部、香川景樹、与謝野鉄幹・晶子の作品を紹介した。周作人は、日本の詩歌の特徴を次のようにとらえていた。一つは、形式が小さいため、長編叙事詩には仕立てられないが「一地の情景、一時の感情」を表現するには適している。もう一つは、字数が少ないからこそ、簡潔さのなかに余韻がこめられる、というものである。周作人の訳詩は、当時の詩壇に影響を与え、短い自由律の詩の流行を促した。いわゆる「小詩運動」を刺激した側面がある。（注3）

他に、翻訳の分野では、二〇年代に芭蕉の句を訳した成仿吾や、一茶の句を訳した周豈明が知られている。四一年には銭稲孫が『日本詩歌選』を北京と東京で出版した。芭蕉、去来、嵐雪、几薫、加賀千代、蕪村、一茶、子規、碧梧桐、虚子の作品二十九句について、原詩と翻訳を対照させている。他に『万葉集』の長短歌四十四首と、和歌や近体詩を翻訳している。巻末に、採録した作者の解説、および周作人の跋文が付されている。

戦中から戦後にかけては国交もなく、中国人の対日感情の面からも、俳句の理解が進むような環境ではなかった。それでも、少数の人々が俳句に関心を持ち続けた。創作では葛祖蘭、研究翻訳では李芒、林林、彭恩華がいる。葛祖蘭の俳句については、かつて紹介したことがある



彭恩華による初の日本俳句通史

のでここでは触れない。（注4）李芒・林林・彭恩華の業績についても同じ文章のなかで簡単に記しておいた。

一九六六年に始まった文化大革命は、俳句研究の分野にも災いをもたらした。彭恩華の場合、六六年に約四十万字に及ぶ日本俳句史に関する出版用原稿を完成したが、それらすべてを失った。また、俳句の文献と研究ノートも失った。文革の嵐が収まると、彼は再度執筆を始め、一九八三年に上海の学林出版社から『日本俳句史』を上梓した。中国初の俳句史の専著である。巻末には、山崎宗鑑から大野林火に至る俳句一千句が漢訳付きで載っている。また、扉頁には趙樸初の題字がある。

一九七六年、毛沢東の死と「四人組」失脚により、政治の流れは大きく変わった。特に、中国共産党の十一回三中全大会以降、対外的な開放政策が国是となると、四つの現代化を進めるために、資本主義諸国を研究する風潮が起った。日本研究も、かつてないほどの高まりを見せた。一般の人々も、戦後急速に経済発展を遂げた隣国日本に対して高い関心を示した。八〇年の、鑑真和上像の里帰り事業や俳人協会の訪中は、そうした環境下で実現した。俳句も政治・経済・歴史・社会等の日本事情を知る手がかりとして、中国大衆に受けとめられた。

八〇年四月二十八日の「人民日報」は、俳句に関して三つの特集を組んだ。一つ目は、孫東元の署名記事で、鑑真和上について解説したあと、その像を句にした松尾芭蕉の業績と俳句の魅力を紹介している。二つ目は、陸心の署名記事で、俳句の沿革や特色について解説している。三つ目は、芭蕉の住まいのあった深川庵跡地から、石蛙が発見されたという話題。これは、「古池や蛙とびこむ水の音」の句が、彼の代表作の一つとして広く知られていることを前提にして書かれたもの。こういう三面記事風の話題が共産党の機関紙に載ること自体、急速な意識変化を物語るものであり、日本を多方面から理解しようとするものであろう。俳句特集記事が出てから一ヵ月後の五月末に、俳人協会の派遣した訪中団が北京に到着する。

次に、一九八〇年から八二年までの、漢俳をめぐるトピックスを一覧表にしてみる。この三年間は、漢俳の立ち上げ期間、あるいは、草創期とみることができる。

漢俳簡史　（一九八〇年～一九八二年）

一九八〇年

四月　唐招提寺の鑑真和上像、鑑真ゆかりの地、揚州の大明寺に「里帰り」を果たす。

趙樸初（中国仏教協会会長）、唐招提寺の森本長老に新型の漢詩（漢俳）を贈る。

『人民日報』（十八日付）に、俳句に関する三つの特集記事が掲載される。

五月　俳人協会の代表（大野林火団長・総勢二十一名）が、中日友好協会の招きにより中国を訪問する。二十九日より翌月八日までの日程で、北京・蘇州・無錫・上海を訪れる。この間に、趙樸初（中日友好協会副会長）、畢朔望（中国作家協会対外委員会負責任）、林林（中国人民対外友好協会副会長）、杜宣（中日友好協会上海分会副会長）が日本側に漢俳を披露。

八月　『人民文学』八月号に、回族の詩人、沙蕾が漢俳三首を発表する。

趙樸初、井上靖（日中友好協会会長）に漢俳を贈る。

一九八一年

三月　趙樸初、鎌田忠三郎（奈良市前市長）に漢俳を贈る。

四月　『世界文学』（中国社会科学出版社）四月号に、林林の訳による「芭蕉俳句選」五十句が掲載される。

林林、袁鷹（「人民日報」文芸部主任）らが来日して俳人協

会を友好訪問する。二日から十四日までの日程で、東京、箱根・金沢・京都・奈良・伊勢・大阪を訪れる。日本側関係者と俳句・漢俳を談じ、多くの漢俳を作る。

六月　『詩刊』六月号の「漢俳試作」欄に、趙樸初、林林、袁鷹の作品が五首ずつ掲載される。また、林林の俳句解説文「最短的詩」も併せて載る。

八月　『人民日報』の「漢俳試作」欄に、趙樸初五首、林林四首、陳大遠（中国人民対外友好協会理事）三首、鍾敬文（京都師範大学教授）五首、公木（吉林大学教授）三首、袁鷹三首がそれぞれ掲載される。

十月　俳人協会の代表（大野林火等六名）が中日友好協会の招きにより中国を訪問する。三十日から十一月六日までの日程で、北京・西安を訪れる。同地の文学者や詩人と意見交換を行う。『日語学習与研究』第四期号に、沈策、李芒、高橋史雄、王樹藩の和歌や俳句に関する論文が掲載される。同雑誌にはその後も多くの和歌俳句論が掲載されている。

十二月　『日中文化交流』三一〇号に、林林訳「芭蕉俳句選」が掲載される。

一九八二年

一月　『人民中国』一月号に、漢俳に関する記事が掲載される。記者の趙華が林林へのインタビューを中心にまとめたもの。

五月　「人民日報」（八日付）に、趙樸初の漢俳五首が掲載される。

六月　「冬野」（俳句結社の月刊誌）、漢俳に関する以下の特集記事を組む。小原菁々子「漢俳考」、瞿麦「漢俳のことなど」、草間時彦「和漢連句の復活の提案」

十月　俳人協会の代表（沢木欣一団長、総勢二十二名）中日友好協会の招きにより中国を訪問する。二十一日から二十九日の日程で、北京・杭州・上海を訪れる。龍彼徳（中日友好協会）、林林、日本側に漢俳を披露する。

四　最近の動向

漢俳が生まれてから、今年（九八年）で十八年になる。中国詩歌の三千年におよぶ伝統を大河に例えるなら、その河口の中洲に湧き出た泉のようである。古典詩やわが国の和歌俳句に伍して、文芸の一ジャンルとして認知されるには、時の試練が必要であろう。まず、作者層が厚くなり、魅力ある作品が次次に出ることが望まれる。

現在の漢俳詩人のリーダーの一人である林岫は、九四年に出版した『漢俳首選集』（青島出版社）のなかで、漢俳の成長に期待感を表している。

漢俳は、十四年このかた中国詩歌の花園に咲いている新しい花である。……十四年という歳月は一瞬にすぎないが、漢俳が生まれてから今日の《漢俳首選集》の出版にいたるまでの発展の歩みは、まさに創業の艱難に満ちた、長い道程のように感じられた。いま、われわれは、ますます多くなっている漢俳作者や多くの新作品を目のあたりにして、それが雨後の竹の子のように、青春の力に満ちあふれていることに喜びを覚えている。古い伝統文化の肥沃な土壌に根をおろしながら、現代新文学のはつらつとした生命力をもっている漢俳は、古くて新しいもの、これぞ漢俳である。

漢俳は古典の遺産を行かせるのは強味である。創始者の趙樸初にしても、それに準じる畢朔望、林林、杜宣にしても、古典の教養の深い文人・知識人である。古典的な絶句や律詩にみられる、平仄や押韻をそのまま適用して作ることができる。最近の解説書は、こうした作品を「律格詩」と名づけている。これに対して、規則は少なくして自由に作ろうとする「自由体」がある。季語についても、使おうとする古典派と、そうでない現代派とがある。古典に学びつつも古典にしばられない自由性が、漢俳理論のコンセンサスになっているようだ。

漢俳はいまの中国でどれくらい普及しているのか、作者はどれくらいいるのか、客観的な数字を私は知らない。普及度も作者数も極めて限られている、というのが九八年の夏、私が一週間ほど北京に滞在し

て得た感触である。ただし、普及の努力は地道に続けられている。次に、その事例を二つ挙げる。

一九九〇年、日本航空の海外支店網が窓口となり、日航財団が主催した、小学生対象のハイクコンテストがあった。二十六の国、地域から、十九種類の言語で書かれた、六万句が集まった。中国からは、漢俳九千五百首の応募があった。後援したのは、北京市の場合、中国国家教育委員会と北京市教育局、指導したのは、第一師範学校の国語科教師である。しかし、教師にとって経験も知識もないことなので、事前に二十五名の教師を選んで講習をし、その後、教室で実作指導に当ったという。上海でも少年宮の協力により、同じような方法で三千句を集めた。学校教育の場で、たとえ上からの指導であるにせよ、このような活動があったことは注目される。(注5)

九〇年から九三年にかけて、北京と重慶では「漢俳創作講座」が開かれた。担当した林岫(中国新聞学院古典文学教授)によると、受講した青少年が興味をもった題材は、純粋な自然風光よりも、生活に即した理念や人生の苦楽や恋愛に関するものであったという。

林岫は一九四五年生まれの女流漢俳詩人で、先に紹介した『漢俳首選集』の編集者である。この本は、初の漢俳アンソロジーで、漢俳詩人三十三名の作品三百首を載せている。日本人にも配慮して、作品には訓読が施され、作者の紹介文には日本語訳が付いている。翻訳は鄭民欽が担当している。また、趙樸初の題字および林林の序文、金子兜太の祝辞がある。こうした長老が名を列ねていることから判断すると、待望されていた一冊である。漢俳の発展に尽力してきた林の文章はその意義を語っており、金子の文章は俳人として評価を下している。

漢俳は中日文学界の交流により実を結んだ果実であり、中日文化交流史に深遠な意義を有する。その昔、漢詩は日本に輸出されたが、いま、中国の詩人は俳句をとり入れて漢俳を創造したのである。中国と日本の友情はさまざまなチャンネルを通じて具現すべきである。漢俳を作ることも、両国文化の心を通わせる道ではなかろうか。(林林　原文は中国語)

漢俳は明確に独立した表現様式(ジャンル)にまで成熟している、と愚考しております。初めの頃は、わが国の俳句形式の影を拭えなかったのですが、いまではその印象はまったくなくなりました。また、中国伝統の詩形式とも、白話の詩とも違う詩姿と内容を読みとっております。それらの詩とは異なる、短く歯切れのよい新鮮な詩感があります。(金子兜太・現代俳句協会会長)

出版に関しては、現代俳句協会が創立四十五周年と日中国交正常化二十周年を記念して作った『現代俳句・漢俳作品選集』が注目される。九三年に完成した第一集には、同協会に所属する二〇三名と、漢俳詩人二十名の作品が収められている。俳句とその解説文には中国語訳が付され(鄭民欽訳)、漢俳にはその訓読文と俳句体の訳が付いている。巻頭には金子兜太と林林の序文がある。日本側九名、中国側四名の刊行委員が出版に尽力した。委員の一人である小宅容義は、あと書きのなかで、漢俳への期待感を次のように記している。「何億という中国民衆、それも農民や労働者という庶民の間に漢俳の花が開くことを想像するのは、同じ夢でも桁違いに楽しい。何十年先いや、何百年先になろうとも、是非この詩の華を大民衆の手によって咲かせてもらいたいものだ。」

なお、九七年には『現代俳句・漢俳作品選集』の第二集が出ている。作品を寄せた俳人は二一〇名、これは第一集とほぼ同数であるが、漢俳詩人は一一四名と、六倍近く増加している。そのなかに、四人の小学生の作品も収められている。次に、長老、壮年、小学生の作

1994年に出版された初の本格的な選集

品を一首ずつ引く。趙樸初らの起ち上げた漢俳は、次世代のなかに花開きつつある。

喜賦大谷武伉儷来訪二首其一　大谷武伉儷来訪を喜びて賦す二首其一

趙　樸初（北京）　趙　樸初

美意共雲浮　美意　雲と共に浮く
西南処処百花洲　西南のかなた　処処（ここかしこ）　百花洲
好作称心游　好　心に称（かな）う游びを作（な）さん

岳陽遇雨　岳陽にて雨に遇う

林　岫（北京）　林　岫

楼頭風雨驟　楼頭　風雨驟（はげ）し
眉間好句天成就　眉間の好句　天（みずか）ら成就（ひらめ）く
霽開山緑透　霽開（はれそめ）て　山緑に透（すきとお）る

虫声　虫声

殷　燕召（小学生）　殷　燕召

深夜已無風　深夜　已（カーテン）に　風無し
緑紗窓外起虫声　緑の紗（そと）の窓外に起（な）く　虫の声
唱与明月聴　明月に聴かせんと唱う

五　結　語

漢俳は日中文化交流の場から生まれた副産物である。交流の窓口の中心にいた趙樸初が、一九八〇年に作ったのが始まりである。三千年を越える詩歌の歴史を有する中国にとって、俳句は比較的新しい詩型であり、一九二〇年代以前にはほとんど知られていなかった。周作人らの日本留学経験者が翻訳に努め、紹介するようになって以降、注目する人たちが現れた。しかしながら、戦争や国交断絶の状態が続いたために、一般の人々の認知するところとならなかった。文革の騒ぎがおさまって、日中関係が雪どけの時を迎えると、日本文化への関心が高まり、そのエネルギーが「漢俳」という新しい詩を生み出した。現在は、第四章でみたとおり、作者層が広がり、俳句と漢俳を仲立ちとした日中の詩人交流が深まりつつある。

今後の注目点として二つを挙げておく。第一に、どのように普及しどのような作品が生まれるか、ということである。作品の量と質が漢俳の発展の鍵をにぎっている。第二に、漢俳も俳句と同じように、仲間が集まって創作と鑑賞を享受する「参加型」の文芸であるから、「座の文学」として育つ可能性がある。もっとも、第四章でみたように、俳句と漢俳とを一冊に収めた選集が現代俳句協会から二回出版されており「国境を越えたゆるやかな座」は現実化している。日本文学にとっても中国文学にとっても、かつて経験したことのない領域である。ボーダーレス時代の「ハイク」が中国ではどう定着するのか見守りたい。

注　記

注1　小林祥次郎『季語再発見』（小学館　一九九八年）
注2　『俳人協会訪中団報告書』第一回（俳人協会　一九八〇年）
注3　中西進・厳紹璗編『文学』（日中文化交流史叢書6）第二章　劉雨珍「小詩運動」（大修館書店　一九九五年）
注4　中田伸一「中国における俳句の受容について」（小山工業高等専門学校　研究紀要　第二十三号　一九九二年）
注5　日航財団編『地球歳時記90'』（学生社出版　一九九〇年）

（受理年月日　一九九八年九月三十日）